

法政大学学術機関リポジトリ  
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

## 明治大正昭和初期における静岡県焼津の鯉漁撈組織

著者	大崎 晃
出版者	法政大学教養部
雑誌名	法政大学教養部紀要．社会科学編
巻	59
ページ	95-138
発行年	1986-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/4448">http://hdl.handle.net/10114/4448</a>

# 明治大正昭和初期における

## 静岡県焼津の鰹漁撈組織

大崎 晃

### 目次

- 一 序
- 二 北新田の漁船と乗組員
- 三 出資者団体としての船中
- 四 船中内部の利益配当法
- 五 法人と船中による漁船共有制の経営的意味
- 六 結語

### 一 序

漁業における資本主義の発達について、筆者は静岡県焼津の鰹漁業を対象に、これまでに若干の資料のとりまとめを行ってきた。そして当地の鰹漁業が近世の運上制に発する漁民集団「船中」を単位として営まれてきたこと、また近代における漁船の大型化・動力化に際してその資金を漁船共有制による地主・魚商加工資本の半額出資で得たこと

(二)  
を示した。

ところで一般にひとは、家族を養うために家産を投じて家業を営むが、その際自己の家産を所有する自立的経営者でなくとも、本家あるいは共同体の生産に参加する、いわゆる乗船権や用益権を有する場合も家業とみなされよう。漁業の場合、船主・網元以外の船方・網子がこれにあたる。このような乗船権・用益権は、より大きな船あるいは網の経営の中にその一部として包摂されているが、この関係の基礎に血縁関係があった。そして近代の制度的企業の変革とともにこの血縁共同体的関係は、企業経営の上でいかなるかわりをもつようになるのだろうか。今回の主題は、漁撈単位としての船中をこうした側面からみることにある。このことは、また資本主義と血縁共同体との異質のウクライドの連接の問題にも通じる。だとすれば両者を媒介させる経済的契機は何か、これを漁業における資本と労働力の創出・再生産過程の中で筆者は考えてきたが、今回は特に労働力の問題について若干の資料と愚見の開陳を試みたい。

#### 注

(一) 拙稿「近世末期駿州焼津の鯉漁業組織について」法政大学教養部紀要 第五一号 社会科学編 昭和五九年 一三〇～四八頁。

(二) 拙稿「静岡県焼津における鯉漁業の発達と東海遠洋漁業株式会社」法政大学教養部紀要 第五五号 社会科学編 昭和六〇年 二九〇～五七頁。

## 二 北新田の漁船と乗組員

焼津地区の旧浜方三ヶ村（城ノ腰・鰯ヶ島・北新田）における漁業および漁撈組織について、まず近世末期（嘉永四年）の取極からみていこう。

漁方規定取極之事<sup>(二)</sup>

一 鯉漁船之儀ハ御運上船ニ而御鑑札頂戴仕罷在候ニ付銘々大切ニ相心得可申候且亦地他之船々漁場込合之節沖合取極茂有之候ニ付右御鑑札之権威ハ勿論我卒ケ間敷義決而致間敷候事

一 鯉漁船之義銘々乗組之者抱置候得共万一乗組之内勝手ニ他之船江乗組度申出候共其船主方ニ而決而取扱申間敷候尤三ヶ村之内誰船ニかぎらず乗組之者少人数ニ而漁業差支候節ハ船主共相對之上漁事家業差支無之様取計可致候事

一 鯉釣漁船順番ニ可致候事

一 餌鰯三月ヨリ九月迄順番ニ網引可申候事

一 御献上漁場猥ニ釣入申間敷候事

一 志び釣漁三月ヨリ九月迄堅致間敷候事

一 鮫釣漁右同断之事

一 手繰網右同断沖引一切致間敷候事

一 底釣漁右同断之事

一 置網堅致間敷候事

右之通前々ヨリ取極置候処近来自然ト猥ニ相成候間万一以後勝手ニ漁業差働候心得違之者在之候而者前之取極ニ相成差支之事共出来難渋ニ相成候間尚亦今般一同談事之上取極仕候上ハ右ヶ条之趣急度相守可申候為後証連印規定仍如件

嘉永四亥年二月

夏漁船持主

城腰村

忠

七

長九郎

これによると当時の漁業種類は、鰹・鮪（志び）・鰯の釣漁業をはじめとし、ほかに手繰網や（定）置網があった。その中で特に運上船として公許された鰹漁はもっとも重きをなし、その漁期には他の漁業の操業は禁じられていた。

		右同断		右同断	
		北新田村		鰯ヶ島村	
長兵衛	次郎兵衛	嘉平	伝兵衛	九郎左衛門	津右衛門
				佐左衛門	源兵衛
				久次郎	市蔵
				半四郎	藤兵衛
				庄兵衛	
市左衛門	平兵衛	仁平	吉三	治平	猪之右衛門
				伝七	新三郎
				吉平	佐次兵衛
				平左衛門	
				半左衛門	
				平左衛門	

鰹漁の漁期は餌鰯網の使用期間からみると三月から九月までであった。この期間の鰹漁がいわゆる大漁で、他の期間に営まれる漁業は小漁と呼ばれる。やや時代が下るが明治二十三年の焼津地区旧浜方三ヶ村の一つ北新田村の主要漁船の所有者とその数は次のとおりであった。

宅等船鰹船  
(二)

北原 九左衛門	中野 伝右衛門
近 藤 久 蔵	増 田 為 吉
近 藤 半四郎	増 田 竹之助
瀧 口 松之助	近 藤 次郎兵衛

メ八艘

式等船小漁船

北原 九左衛門	中野 伝右衛門
瀧 口 市之助	瀧 口 松之助
鈴木 久右衛門	増 田 直 蔵
増 田 為 吉	西 川 市 助
近 藤 伊右衛門	増 田 与 吉
清水 菊 蔵	増 田 万右衛門
近 藤 伊平次	北原 徳右衛門
秋 山 松 吉	中 野 文 吉
近 藤 半四郎	近 藤 久 蔵
増 田 喜市郎	

## 式等仰網

## ノ拾九艘

北原 九左衛門  
近藤 次郎兵衛  
近藤 久藏  
増田 為吉

龍口 松之助  
近藤 半四郎  
増田 竹之助  
中野 伝右衛門

## ノ四張

ここに記されている漁船の宍等や式等が何を基準にしているのかは不明であるが、恐らく規模の大きさであらう。しかし大漁すなわち鰹漁の間では、さきの取極に「鰹漁船之義銘々乗組之者抱置」「万一乗組之内勝手ニ他之船江乗組度申出候共其船主方ニ而決而取扱申間敷」とあるので、各漁船の乗組員はそれぞれ固定していたと思われる。この慣行は近代になってどうなったか、昭和七年の協定をみよう。

遠洋漁船々数制限協定書<sup>(三)</sup>

第一条 志太郡内関係漁業組合ハ共存共栄ニ進ム可ク從來ノ制度組織ヲ尊重シ以テ漁業統制ヲ図ランガ為メ鰹鮪鮔釣船ノ船数制限ニ関シ左記ノ如ク協定ス

第二条 焼津漁業組合浜当目漁業組合石津漁業組合小川漁業組合田尻北漁業組合田尻浜漁業組合吉永漁業組合藤守漁業組合飯淵漁業組合下小杉漁業組合小浜漁業組合ハ常ニ善隣的精神ノモトニ漁船ノ数ヲ現在数ニ止メ新規増加ノ計画ヲナサザルコトヲ約ス

但シ現在船ガ廃棄解散又ハ漁船ヲ變更シ地元組合ノ漁夫ノミヲ以テ地元船トシテ新規ニ營業ヲナサントスル時ハ地元組合ニ於テ支障生ズルコトナク且ツ他船ノ乗組員ニ絶対影響ヲ及ボサザル限り協定組合ハ之ヲ承認スルコ

トアルベン

第三条 協定組合ハ現在使用漁船ガ天災其ノ他ノ災害ニ依リ使用出来ザル場合ハ同一目的ニアラザルトモ代船ノ乗出シヲ認ム

但シ代船ノ使用期間ハ本船ガ再興スル迄トシ尚鯉鰯漁船ニ關係ナク從來ヨリ營業スルモノ以外ノ鯖釣漁業ハ禁止スルモノトス

第四条 協定組合ニ於テ代船使用ノ場合ハ必ズ本船乗組員ヲ代船ニ乗組マシムルコト但シ不得止ル事情ニ依リ本船乗組員半数以内又ハ三分ノ一以上ヲ他船ヨリ乗組マシムルノ必要ヲ生ジタル時ハ必ズ他船ノ承認ヲ要スルモノトス

第五条 協定組合ノ船主又ハ船元漁夫ガ他町村ニ船籍アル漁船ヲ所有シ又ハ借用シ事実上船主又ハ船元ヲナシ或ハ之ニ準ズル業務ヲナサントスル場合ニ於テハ協定組合ノ會議ニ依リ其ノ可否ヲ定メ独断業務ノ開始ヲナスコトヲ得ズ

第六条 協定組合ノ漁夫ハ地元組合又ハ固有船主及ビ船元ノ諒解承諾ナクシテ協定組合相互ノ漁船ニ乗組マセ又ハ雇入ルコトヲ得ズ

第七条 協定組合ノ船主又ハ船元ガ自船ノ廃止又ハ解散に依リ其ノ乗組員ガ失業ノ状態ニアル時ハ地元漁業組合ノ漁船ニ於テ之等乗組員ノ失業ヲ救ヒ事情不得止ル場合ハ協定組合ノ漁船ニ依頼スルモノトス

第八条 協定組合ノ各船主及船元ハ他船ニ乗組ミ居ル者ヲ爭奪スルコトヲ禁ズ

第九条 協定組合間ニ於テハ乗組漁夫ノ脱走者ヲ無断ニテ乗船セシムルコトヲ得ズ但シ此ノ場合ニ於テハ脱走者ノ事情ヲ悉知シ固有船主又ハ船元ノ完全ナル承諾ヲ得ルヲ要ス

第十条 協定組合ニ於テ脱走漁夫ニシテ貸借アルモノヲ乗船セシメントスル時ハ船主又ハ船元ニ於テ其ノ債務ヲ引受ケシムルコトヲ要ス



第一表

大正五年度焼津北新田地区鯉漁船乗組員

戸主	長男	二男	三男	四男	五男	養子	弟	その他	乗船した船
北原吉太郎	源之丞	忠吉							東洋丸
北原万一郎									日ノ出丸
北原治郎兵衛	吉平	安吉				伊三郎			東洋丸
小林万助	弥七								明神丸
(鈴木)									東洋丸
滝口新市									太洋丸
滝口猪之助		梅万吉							太洋丸
滝口盾右衛門									日ノ出丸
(同)									富久丸
村松松治郎	好吉		精一				金亀		明神丸
小林寅吉	忠吉						鉄太郎		東洋丸
(北原)									富久丸
近藤寅吉	久五郎	新作	為吉			安太郎			川岸丸
鈴木久蔵									川岸丸
鈴木幸太郎	久一								明神丸
鈴木銀之助									愛鷹丸
高橋与吉	房吉								富久丸
増田直蔵									日ノ出丸
近藤音吉									明神丸
増田秀吉									富久丸
増田半平			彦一郎						明神丸
増田為吉	吉太郎						伊右衛門		明神丸

增田權吉	西川文吉	近藤辰造	近藤寅吉	鈴木清左衛門	近藤兼吉	(同)	西川市太郎	(近藤)	近藤忠次郎	近藤伊左衛門	增田龜吉	(小林)	小林金作	小林才吉	北原梅吉	北原席之助	加藤長太郎	小林金太郎	西川寅吉	(同)	小林鶴吉	(同)	小林鉄藏
松太郎				半兵衛			吉兵衛		友吉					金太郎	熊吉					兼吉			
文七									竹次郎					兼吉	新吉						辰吉		
				平吉											兼吉								
																				金作			
						</																	

第一表

つづき

戸主	長男	二男	三男	四男	五男	養子	弟	その他
小 林 金 吉	友 吉							
増 田 与 吉	梅 吉							
(同)								
増 田 佐 助	誠							
(萩原)								
増 田 万 吉	喜 太郎							
増 田 定 吉	松 蔵	平 太郎						
秋 山 仙 蔵	幸 作	周 吉						
増 田 城 吉		鹿 蔵						
増 田 幸 太郎								
西 川 為 吉	久 一							
清 水 才 次郎								
増 田 福 太郎								
増 田 安 之助								
北 原 丑 之助								
北 原 徳 右衛門	金 右衛門							
(近藤)								
増 田 長 太郎						兼 吉		
西 川 浅 太郎								
増 田 国 太郎								
浜 田 広 次								
長 谷 川 才 次郎								
福 一 丸	福 一 丸	福 一 丸	日 出 丸	高 根 丸	愛 鷹 丸	東 洋 丸	東 洋 丸	明 神 丸
明 神 丸	明 神 丸	日 出 丸	明 神 丸	東 洋 丸	高 草 丸	明 神 丸	明 神 丸	明 神 丸
富 久 丸	愛 鷹 丸	富 久 丸	富 久 丸	富 久 丸	富 久 丸	富 久 丸	富 久 丸	富 久 丸
乗船した船								

近藤平蔵	近藤鉄蔵	近藤久蔵	近藤半蔵	鈴木吉蔵	中野市郎兵衛	鈴木熊吉	増田熊吉	滝口文蔵	天野徳三郎	(同)	(増田)	(増田)	増田七郎次	清水利吉	秋山松吉	北原徳蔵	(秋山)	北原直蔵	(中野)	秋山伊之助	西川角吉	中野松之助	増田徳三郎
				権吉					亀吉				兼吉	金七	吉十	福蔵			席吉				
					富次			友市								徳十			兼仁吉助				
																				兼吉			
												常吉									新太郎		
要作	寅吉																	藤七				万右衛門	六太郎
明神丸	明神丸	富久丸	福一丸	日出丸	東洋丸	東洋丸	高草丸	日出丸	東洋丸	富久丸	日出丸	富久丸	日出丸	富久丸	東洋丸	東洋丸	高草丸	日出丸	東洋丸	東洋丸	太洋丸	愛鷹丸	富久丸

第一表 つづき

戸主	中野伝之助	鈴木亀吉	増田吉蔵	鈴木代吉	(泉)	増田竹之助	(同)	増田鬼一郎	滝口辰之助	滝口松之助	鈴木平次郎	(近藤)	(村松)	(増田)	望月兼吉	増田岩吉	山口鉄次郎	増田三太郎	山本金之助	杉本清太郎	鈴木繁雄	増田豊吉
長男				梅吉							重太郎					源太郎						万右衛門
二男				幸次	幸			幸一		鉄新太郎												
三男								寅吉														
四男												吉太郎										
五男												金太郎										
養子				直吉	才吉	幸一						今吉										
弟																						
その他																						
乗船した船	愛鷹丸	福一丸	明神丸	愛鷹丸	福一丸	高草丸	福一丸	明神丸	太洋丸	太洋丸	東洋丸	太洋丸	富久丸	日ノ出丸	愛鷹丸	日ノ出丸	愛鷹丸	高草丸	恵比寿丸	愛鷹丸	太洋丸	高草丸

増田長吉	増田彦太郎	秋山常蔵	(小林)	増田留吉	(増田)	増田村吉	滝口兼吉	新藤三太郎	増田甚右衛門	(原田)	(同)	増田万吉	鈴木重兵衛	(同)	(滝口)	(鈴木)	増田寅吉	増田吉之助	(同)	近藤鉄次郎	(滝口)	増田音吉	滝口音吉
幸次郎	亀蔵	角吉									鉄一吉	定一吉	亀吉					辰五郎					
									玉吉			善作				新寅太郎吉						虎吉	
			吉蔵										芳太郎										
銀太郎	菊蔵																						
			為吉	音吉																			
友吉											啓太郎										次郎	仙吉	
明神丸	明神丸	明神丸	明神丸	川岸丸	愛鷹丸	太洋丸	高草丸	金生丸	明神丸	高草丸	福一丸	明神丸	高草丸	明神丸	太洋丸	明神丸	富久丸	明神丸	明神丸	日ノ出丸	太洋丸	高草丸	太洋丸

第一表 つづき

戸主	長男	二男	三男	四男	五男	養子	弟	その他
滝口 虎之助 武政 徳之助 増田 幸太郎 鈴木 竹之助 山口 音吉 （同） 近藤 春吉 滝口 亀吉 鈴木 福三 鈴木 忠市 増田 金作 北原 直吉 鈴木 新八 （鈴木） 北原 音吉 北原 熊吉 近藤 久作 （近藤） 山本 源蔵 近藤 長太郎 鈴木 半三 長谷川 甚太郎	周吉 新吉 久蔵	兼吉	新吉 音吉	松之助	安吉	忠太郎 平太郎 銀次郎	兼豊 吉吉 松蔵	直鉄 吉蔵
乗船した船								
太洋丸 太洋丸 明神丸 愛鷹丸 高草丸 明神丸 富久丸 太洋丸 東洋丸 東洋丸 愛鷹丸 愛鷹丸 東洋丸 明神丸 愛鷹丸 東洋丸 明神丸 富久丸 太洋丸 太洋丸 福一丸 富一丸 福一丸 恵比寿丸 日ノ出丸 富久丸 東洋丸 東洋丸 愛鷹丸 愛鷹丸 東洋丸 明神丸 愛鷹丸 東洋丸 太洋丸 太洋丸								

[illegible]



第一表 つづき

[illegible]

運上鑑札制度はなくなっても、代船を除いて鰹漁船の新たな参入は規制されており、漁船に所属する乗組員の単位組織もまた存続している。また小漁期間は「漁夫ニシテ随意ニ他業ニ転シ或ハ他船ニ乗込ミ或ハ漁夫個人ガ小型鯖船鮭船ヲ求メテ漁業ヲ営ムモ随意」ではあっても、鰹漁中は近代においても「必ズ譜代ノ船ニ乗込ミテ漁業ニ従事スル

「大正五年十月調 組員名簿 宿組・新地組」(北原吉右衛門氏蔵)より作成。

小林 松吉	増田 竜雄	秋山 兼吉	山本 良吉	(同)	北原 銀蔵	近藤 熊吉	鈴木 仙太郎	増田 政蔵	中野 松蔵	北原 友吉	西川 幸吉	秋山 鉄蔵	鈴木 徳次郎	(飯島)	(寺内)	村松 善一郎	村松 利吉	(増田)
					長太郎	久太郎	由太郎	岩吉										
			倉吉															二郎
									伝吉									
									作蔵	幸一	政蔵							
			寅次															三郎
			仁左衛門															
富久丸	富久丸	富久丸	吉久丸	福祥丸	東洋丸	福一丸	愛蔵丸	高草丸	愛蔵丸	東洋丸	愛蔵丸	日ノ出丸	愛蔵丸	福一丸	福一丸	愛蔵丸	高草丸	福一丸

義務ヲ履行<sup>(四)</sup>」するものとされた。かくて三月より九月まで鰹漁以外の漁業をすべて禁止し、乗組員労働力を鰹漁に結集したのであった。

つぎに鰹漁船と乗組員との関係についてみよう。さきにみたとおり、焼津北新田地区には大正初期に八隻の鰹船があり、その持主と近代における船名は、北原九左衛門の東洋丸、中野伝右衛門の愛鷹丸、近藤久蔵の富久丸、増田為吉の明神丸、近藤半四郎の福一丸、増田竹之助の高草丸、瀧口松之助の太洋丸、近藤次郎兵衛の日ノ出丸であった。また北新田地区には大正五年に二百八世帯の漁家があり、それぞれ乗組む鰹漁船は第一表のとおりであった。北新田の漁家は、鰹漁の期間に地区内にある八隻の鰹漁船のいずれかに乗船し、地区外の船に乗るケースは十四件にすぎない。また同一世帯内で父子兄弟婿養子等複数の者が乗っている場合は同一の船に乗っており、別々の船に乗っているケースは十三件にすぎない。したがって一隻の乗組員間は血縁関係が強く親戚姻戚関係で結びつき、「各船毎ニ世襲的ニ乗組員団結シテ一ノ団体ヲ成形シ特別ノ事情ナキ限り解団分離セズ」<sup>(五)</sup>この組織は「船中」と呼ばれている。

### 注

- (一) 近藤久一郎氏蔵。焼津漁業協同組合「焼津漁業史」昭和三九年 六〇〜六一頁にも写真版所収。
- (二) 「焼津村北新田」明治三三年 北原吉右衛門氏蔵。
- (三) 「志太郡内十一漁業組合 漁船漁網数制限協定書」近藤久一郎氏蔵。
- (四) 焼津漁業組合「焼津漁業組合概況」昭和一〇年 九頁。
- (五) 焼津信用販売購買利用組合「経営事例」昭和九年 三七頁。

### 三 出資者団体としての船中

近世の運上制に起源を有し、血縁集団に基礎をおく乗組員団体「船中」の内部組織はどんなものか。焼津におい

て、東海遠洋漁業株式会社とともに出資法人として存在した焼津町生産組合と、漁船共有関係を通じて関連した船中との関係を記した次の記録がある。

焼津漁業者ノ慣習及漁船経営ヲナス我が組合ト乗組船員トノ関係<sup>(一)</sup>

- 一、組合所屬船ノ船元ハ其多クハ元個人船主時代ノ船主ナリ、現在組合ガ船主トナリ所屬船毎ニ船元アリテ一船ノ世話係トナリ魚市場ニ於テハ船長等ト共ニ船主ノ代表トシテ其ノ任ヲ尽シ出船入船ノ場合ハ諸般ノ指揮ヲナシ組合ニ対シテハ船員ノ代表トナル等一船業務関係ノ支配ヲナス
- 二、乗組員ハ團結シテ一ノ団体ヲ成シ特別ノ事情ナキ限り解体セズ、此ノ慣習ニ依リ将来船員トナル幼年者ニ漁撈収益ノ一部ヲ与ヘテ扶助シ老年者ニモ相当ノ収益ヲ分配シテ敬意ヲ表ス、従前各漁船ガ自ラ飼料鰯ヲ獲ル時代ニハ老幼者ハ網船ニ乗リテ本船ニ専屬シ餌料ヲ獲リテ間接鱈漁業ニ従事セリ
- 三、組合ハ其所屬船ヲ建造スルニ当リ船価資金ヲ船元ヲ中心トスル乗組船員等ト共同ニ出資ス、其ノ出資率ハ一定ナラズ、普通ハ半額宛ナルモ七三・六四ノ割合ノモノモアリテ其ノ軌ヲ一ニセズ
- 四、船元ハ総テ乗組船員中ニ於テ最も多額ノ出資者ナリ
- 五、漁船建造資金以上ノ如クナル為メ所有權ハ組合所有船トスレドモ使用權ハ其ノ乗組船員団体ニ限リテ不文律ニ之ヲ実行シ變ルコトナシ
- 六、船員団体ノ人数少ナキ船ハ雇漁夫ヲナス、雇漁夫ハ概ネ月給ナリ
- 七、船員団体ノ乗組船員ハ漁獲高ニ依リ既定ノ分配制度ニ依リテ各所得ヲ受ク
- 八、沖乗船員ニハ奨励金（漁獲高ノ百分ノ五）ヲ給シ奨励金ハ沖乗船員ノミニテ分配ス
- 九、船長運轉士船頭機関長油差ニハ若干宛ノ手当ヲ給ス、之ヲ役員代ト云フ、其ノ他航海中又ハ碇泊中船員ノ多数ハ交代ニテ當番ヲナシ其ノ安全ヲ期ス、當番ニハ當番代ヲ給ス、船員中ノ青年ハ他ノ船員ヨリ常務ニ服スル事多シ、故ニ沖乗船員中ノ青年ニ若衆手當ヲ給ス、炊事ニ従事スル船員ヲ定メ置キテ其ノ任ニ就クモノニ炊夫代ヲ給ス

十、船元自身ハ船員ノ岡役トシテノ収入以外漁具（罾竹鮎縄）桶薪食器（飯櫃土瓶茶碗等）莚莫座正月ノ祝ノ費用ヲ負担シ船元代ヲ受ク

十一、舁ハ漁船一隻ニ付キ付属船トシテ二隻宛大抵船元ニ於テ造リ舁代ヲ受ク、舁ハ漁獲物ノ陸揚及冷蔵用水飲料水食料薪等ノ積込ニ使用ス

十二、漁船利用料（船徳）ヲ定ムル基準ハ乗組船員一人当リノ収入ニ冲乗奨励金ノ分配金ヲ合シ尚食費ヲ見積リヲ金ニ換算シ一人ニ付キ月額四拾五円ニ相当スル収入アルモノト予算シ船主ハ船価償却金修繕費及漁船経営費ノ見積予算及船価ニ対シ年八朱ノ金利ヲ得ル予算ヲ樹テ漁業経費ノ見積リ予算ヲナシ以上合計金ヲ漁獲高ト仮定シ以テ漁船利用料（船徳）ヲ定ム、利用料収受法ニ漁獲高歩合金及船員何人分ノ二様トスルハ慣習ナリ

十三、老幼扶助（不文律）夏漁期間丈ケ

イ、幼年男児一歳ヨリ十一歳迄（将来其船ノ船員トナル者ニ対シ全員ニ）船員一人分ノ収入額ヲ分配支給ス、十二歳十分ノ一、十三歳十分ノ一・五、十四歳以上在学中ノ者十分ノ二（船員一人収入ノ割合ニ対シ）

ロ、老年者六十歳以上船員収入ノ十分ノ八、七十歳以上船員収入ノ十分ノ七、以上ハ船ノ出入時及常時漁船ノ雑役ニ陸上ニ於テ服ス

ハ、病氣其他

冲乗船員ニシテ都合上休ミタルモノ及壮年入営者予後備演習応召兵士ハ船員一人分収入ノ十分ノ四、忌中休業者（三親等迄）ハ船員一人分ノ収入、簡閲点呼応召者ハ船員一人分ノ収入、冲乗船員業務上ノ疾病者ハ冲乗船員ト同様ノ取扱

以上ヲ称シテ岡役ト云ヒ岡役代ヲ規定ニ依テ支給ス

十四、冲乗船員年齢ニ依ル歩合

十四歳ハ十分ノ三、十五歳ハ十分ノ五、十六歳ハ十分ノ七、十七歳ハ十分ノ八、十八歳ヨリ以上冲乗ニ従事スル船員ハ全部一人前

餌買人又同ジ

以上の要点は、乗組員団体「船中」は同時に共同出資団体でもあることと、船中内における利益分配法には共同体における経済的な要素が存在することであろう。この二点についてさらに分析を進めよう。

本節では、漁船建造に際しての資金調達について、北新田地区の近藤久蔵を船主とする久次郎船（動力船以後は富久丸）の場合についてみよう。無動力船時代の明治二十年の資金調達は、のちの東海遠洋漁業株式会社および焼津町生産組合などの出資法人はまだ存在しなかったので、船主（動力船以後は船元になる）である近藤久蔵（造）が総予算額の四割を負担し、残余の六割は乗組員である船中船方が分担し、その内訳は次のとおりであった。

明治廿年鯉船中間覚帳<sup>(二)</sup>

三	口	増田 徳右衛門
貳	口	増田 権七
四	口	増田 吉兵衛
十	口	小林 友吉
八	口	小林 与右衛門
六	口	西川 文吉
六	口	増田 銀蔵
二十	口	増田 彦右衛門
貳	口	田 中 友造
四	口	清水 利右衛門
四	口	増田 七郎平

明治廿年亥四月五日始メ  
 内世話大中四歩

メ百七十七口

式口 式口 五口 八口 十二口 十口 十口 武口 六口 五口 五口 十四口 四口 五口

世話人

中野梅吉 近藤伊平二 村松安之助 清水善右衛門 近藤新造 小石清七 長谷川熊右衛門 近藤久七 近藤為右衛門 増田浅右衛門 卷田角造 小林善右衛門 近藤熊右衛門 武政勝造 鈴木佐七 清水平治郎 近藤久造 近藤新造

小石 清 七  
 小林 与右衛門  
 小林 友 吉  
 清水 善右衛門  
 長谷川 熊 吉

時代は下って動力船になった昭和四年、近藤久蔵を船元とする久次郎船中は、第一富久丸と第三富久丸を出資法人東海遠洋漁業株式会社と共同出資で建造所有していた。第一富久丸の船価壹万五千元のうち船中出資分は六割、第三富久丸の船価四万三百円のうち船中出資分は六割であるが、船中出資分のうち三分の一すなわち全体の二割を船元が、残る三分の二すなわち全体の四割を船中船方が出資している。船中船方の出資額は、第一富久丸船価の四割の六千円と第三富久丸船価の四割の壹万六千二百二十円と、これに鮪縄代の半分七百円、艇代の半分三百五円を加えた合計貳万三千二百二十五円であった。その内訳は次のとおりであった。

昭和四年三月十五日<sup>(三)</sup>

一金 六千円也

壹万五千元ノ四分 壹号船価

一金 壹万六千百貳十円也

四万三百円ノ四分 三号船価

一金 七百円也

鮪縄ノ五分

一金 三百五円也



一金 貳万三千百貳十五円也

靜ノ五分

持分

宥号

卷田辰之助

貳号

一金 壹千貳百円也

貳号

近藤 勝雄

三号

一金 八百五十円也

三号

芹沢伊之助

四号

一金 八百円也

四号

増田 半平

五号

一金 八百円也

五号

増田 直吉

六号

一金 七百円也

六号

西川 文七

七号

一金 七百円也

七号

近藤久五郎

一金 七百円也

内金 五百五十円也

金 百五十二円八十銭也

金 三円六十九銭

払込済

払込済

払込済

払込済

払込済

払込済

昭和四年度ニ入ル

不足

四年度利子

		ノ金 百五十六円四十九銭	
		内金 四十円也	
		引ノ金 百十六円四十九銭	四年度配当ニ割
		八号 秋山仁左衛門	不足
		一金 六百七十五円也	払込済
		九号 清水 兼吉	払込済
		一金 六百五十円也	払込済
		十号 芹沢 乙吉	払込済
		一金 六百円也	払込済
		十一号 村松松次郎	払込済
		一金 六百円也	払込済
		十二号 渡 仲吉蔵	払込済
		一金 六百円也	払込済
		十三号 近藤久一郎	払込済
		一金 六百円也	払込済
		十四号 清水 作次	払込済
		一金 五百五十円也	払込済
		十五号 小野田小作	払込済
		一金 六百円也	払込済
		十六号 山本 与作	払込済
		一金 六百円也	払込済

十七号	一金 五百五十円也	増田 常吉	払込済
十八号	一金 五百五十円也	松永 与吉	払込済
十九号	一金 五百五十円也	近藤 春吉	払込済
廿号	一金 五百五十円也	増田 龍雄	払込済
	一金 六百円也		
	内金 五百円也		昭和四年四月ニ入ル
	金 百円也		不足
	金 七円也		四年度利子
	金 四十円也		四年度配当ニ割
	引金 六十七円也		不足
廿一号	一金 五百円也	斉藤 政雄	払込済
廿二号	一金 五百円也	鷺野 長吉	払込済
廿三号	一金 五百円也	秋山 兼吉	払込済
廿四号	一金 五百円也	増田 寅吉	払込済
	一金 四百五十円也		払込済

廿五号 増田伊左衛門

一金四百五十円也

弘込済

廿六号 近藤 久作

一金四百五十円也

弘治濟

廿七号 清水 金一

一金五百兩也

弘治濟

廿八号  
山本 万吉

一金四百兩也

弘治濟

廿九号 增田 彦一

一金四百円也

内金 三百五十円也

金五十円也

金 五十三兩五十錢

卅号 芹沢 銀作

一金三百五十兩也

弘治濟

卅一號  
山本太七

一金三百円也

弘治濟

卅二號 清水 重吉

一金三百兩也

弘治濟

増田 友一

一金三百兩也

弘治濟

昭和四年六月二入ル

不足

弘治濟

卅四号	鈴木 半蔵	一金 三百円也
卅五号	鈴木 兼吉	一金 三百円也
卅六号	石崎竹次郎	一金 三百円也
卅七号	平田 清一	一金 三百円也
卅八号	小林 万吉	一金 三百円也
卅九号	岩本 政一	一金 三百円也
四十号	巻田 友吉	一金 五百円也
一金	三百円也	
内金	貳百五十円也	
金	五十円也	
金	三円五十銭也	
金	二十円也	
引金	三十三円五十銭	
四十一号	鈴木 芳郎	
一金	貳百円也	

昭和四年四月ニ入ル  
不足  
四年度利子  
四年度配当ニ割  
不足

払込済  
払込済  
払込済  
払込済  
払込済  
払込済

内金 百五十円也

金五十円也

金 三兩五十錢

金二十兩也

引金 三十三兩五十錢

四十二号 村松 惣二

一金貳百円也

四十三号  
村松 政次

一金貳百円也

四十四号 西川 梅吉

一金貳百円也

四十五号  
山本太一郎

一金貳百円也

金百兩也

金百兩也

金七円也

金四十兩也

引ノ金 六十七円也

四十六号 松村松太郎

一金貳百兩也

内金 百五十七円三十銭

昭和四年六月四日入ル

不足

四年度利子

四年度配当二割

不足

弘治濟

弘治濟

弘達濟

昭和四年六月四日入ル

不足

四年度利子

四年度配当二割

不足

昭和四年六月マデニ入ル

弘达济

一金 百円也

内金 五十円也

金 五十円也

金 三十円五十銭也

金 二十円也

引ノ金 三十三円五十銭也

昭和四年四月廿日半入

不足

四年度利子

四年度配当ニ割

不足

出資者五十二人の出資額は、千二百円から百円までとさまざまである。払込にあたって一時払いが不可能な場合には、不足額は利子を加算した額を毎年の本人宛利益配当分から差引く方法がとられている。そしてこのケースは特に出資金三百円以下の層に集中している点が目につく。この不足額の立替は、船中の連帯責任として船元によってなされたのだろうか。

#### 注

- (一) 焼津信用販売購買利用組合「経営事例」昭和九年 三七～四〇頁。
- (二) 「明治廿年 鯉船中間覚帳」近藤久一郎氏蔵。
- (三) 「昭和四年 富久丸乗員出資名簿」近藤久一郎氏蔵。

#### 四 船中内部の利益配当法

乗組員集団「船中」は漁船の共同出資団体であるとともに、利益分配の単位でもある。焼津鯉漁業の利益分配法は、総水揚げ高から魚商人への銭切れ（計算誤差の商人への補償）二分、市場口銭四分、漁業組合費一分三厘、漁夫沖



乗奨励金五分、船徳（漁船の修繕・償却費にあてられる）一割五分、それに航海経費を順次差引いた残金に船徳の残額を加えたものを純収益とし、これを出資者と乗組員とに一定比率（代制を用いる）で配分する。乗組員の所得は乗組員の配当分に沖乗り奨励金を、役付きの場合はこれに役代をそれぞれ加算する。出資者は出資者配当（船代）を得、出資者である乗組員はこの両方の合計額を得る。また、乗船しない老人や子供等船中共同体構成員の全体に対して、一定の割合に従って配当がなされる。これを明治二十一年の実際からみよう。

明治廿一年度夏海<sup>(二)</sup>

徳右衛門	吉	友 <sup>三人</sup>
半治郎	与右衛門	文
銀藏	虎右衛門 <sup>三人</sup>	新 <sup>二人</sup>
善右衛門	梅 <sup>二人</sup>	伊 <sup>二人</sup>
利吉	内久	熊吉
浅右衛門	久 <sup>二人新地</sup>	忠右衛門
勝藏	佐七	平治郎
友藏 <sup>二人</sup>	角藏	清 <sup>四分</sup>
大舟 <sup>三人</sup>	あみ舟 <sup>五分</sup>	若 <sup>六分</sup>
と <sup>五分</sup> もろ	久七ノ久藏 <sup>四分</sup>	さ <sup>六分</sup> 五平

六分 久五郎  
 六分十五才 庄太郎  
 三分十二才 松吉  
 二分 金太  
 一分 清松  
 六分 小供  
 梅吉  
 留吉  
 辰吉  
 勘太郎  
 〆四拾三人六分五厘

八分十六才 彦右衛門  
 五分十四才 虎吉  
 二分五厘十一才 藤吉  
 一分八才 久作  
 一分 庄太郎  
 徳右衛門小

八分 清右衛門  
 五分 金太郎  
 二分十才 庄吉  
 一分七才 久治  
 虎吉  
 長吉  
 平右衛門小

徳右衛門以下の乗船者（沖乗漁夫）は、沖乗奨励金付の一人分の所得（一人代）を得た。友吉の頭書の三人の文字は、一世帯で三人が乗船し三人代を受けたことを示す。さ五平と久五郎の六分は乗船しない岡役であり、清七と久七の子久歳の四分は兵役中である。ともろの漕ぎ手は全員で一人代の六分を分け、青年層は若者代の五分を全員で分けた。幼少年者の配当額は次のとおりである。

一歳より六歳まで

七歳  
 八歳

全体に対して一人代の六分  
 一人代の一分  
 一人代の一分

九歳 一人代の五分五厘  
 十歳 一人代の二分  
 十一歳 一人代の二分五厘  
 十二歳 一人代の三分  
 十三歳 一人代の四分  
 十四歳 一人代の五分  
 十五歳 一人代の六分  
 十六歳 一人代の八分  
 十七歳 一人代の八分

この基準は、その後六歳以下の幼児の配当率や、岡役および兵役の配当率に若干の変更があるものの、明治四十三年まで続いた。しかし動力船時代に入った明治四十四年以後は、基準もまた変っていった。大正十三年には次のよう

になった。

大正拾三年夏海ノ部<sup>(三)</sup>

二入	德右衛門	一	清三郎	吉	伊左衛門
友	春	吉	德太郎	小作	文七
三入	彦右衛門	国	久作	梅吉	兼
二入	重吉	久作	梅吉		

伝	又	峯 <sup>房州</sup>	船 <sup>二人</sup>	与	良	吉 <sup>二人</sup>	秋	石	彦 <sup>二人</sup>	勝	金 <sup>三人</sup>	七分	伊 <sup>二人</sup>	才	太 <sup>二人</sup>	利 <sup>二人</sup>
二								太			右衛門	寅	之		郎	
郎	吉	吉	本	吉	一	藏	兼	郎	安	雄	門		助	吉	兼	兼

由	捷	卯 <sup>二人</sup>		庄	虎	兼	彦	吉	銀	清	角	茂	床	半 <sup>二人</sup>	竹 <sup>二人</sup>	松
	三			太			太					助			右衛門	藏
松	吉	郎		郎	次	雄	辰	郎	作	一	藏	辰	国	平	門	

山	宇	庄		石	吉	石	与	清	長	友	政	仁	乙	角 <sup>二人</sup>	虎 <sup>二人</sup>	金
	之			太								左衛門			右衛門	太
熊	吉	吉		善	郎	竹	作	一	吉	金	一	門	吉	松	門	郎

久 <small>四分十五才</small>	久 <small>四分十五才</small>	保 <small>五分十五才</small>	龍 <small>七分十六才</small>	源 <small>七分十六才</small>	啓 <small>八分十七才</small>	伊 <small>八分十七才</small>	半 <small>八分十七才</small>	清 <small>八分十七才</small>	仙 <small>八分十七才</small>	末 <small>佳吉</small>	吉	太 <small>川尻</small>	勝	伊	新
一	郎	一	一	一	郎	作	七	郎	吉	吉	藏	七	郎	太	郎

松 <small>四分十四才</small>	良 <small>四分十五才</small>	弘 <small>五分十五才</small>	三 <small>七分十六才</small>	政 <small>七分十六才</small>	宇 <small>八分十七才</small>	秀 <small>八分十七才</small>	太 <small>八分十七才</small>	竹 <small>八分十七才</small>	六	藤	仁	重	惣	与	元
吉	一		平	雄	一	郎			兵	作	平	吉	七	助	郎

勝 <small>四分十四才</small>	与 <small>四分十五才</small>	錠 <small>四分十五才</small>	新 <small>六分十六才</small>	勝 <small>七分十六才</small>	兼 <small>八分十七才</small>	直 <small>八分十七才</small>	礼 <small>八分十七才</small>	国	利	好	鉄	稻	一
郎	郎	太	郎	雄		吉	一	吉	吉	一	郎	吉	郎

藤 <small>四分十四才</small>	一	銀 <small>三分十三才</small>	次	豐 <small>一分十二才</small>	吉 <small>小</small>	春 <small>一分十二才</small>	吉 <small>小</small>	半 <small>一分十二才</small>	平 <small>小</small>	一 <small>四才</small>	号	船	船頭 <small>一分七才</small>	船長	若 <small>一分二才</small>	者	やん <small>一分五才</small>	ち	や	文 <small>十才</small>	七	小	七郎 <small>八才</small>	寅	小	久 <small>七才</small>	作	小	石太郎 <small>七才</small>	小	当目屋 <small>五才</small>	小	善右衛門 <small>五才</small>	小
------------------------	---	------------------------	---	------------------------	--------------------	------------------------	--------------------	------------------------	--------------------	---------------------	---	---	------------------------	----	-----------------------	---	------------------------	---	---	---------------------	---	---	----------------------	---	---	---------------------	---	---	-----------------------	---	-----------------------	---	------------------------	---

与 <small>三分十三才</small>	吉 <small>小</small>	松 <small>三分十三才</small>	治 <small>一分十二才</small>	作 <small>小</small>	当目屋 <small>一分十二才</small>	小	浅右衛門 <small>一分十二才</small>	小	二 <small>二十五才</small>	号	船	機 <small>二分六才</small>	械	士	竹右衛門 <small>十才</small>	小	秋 <small>八才</small>	辰	小	半 <small>七才</small>	平	小	久 <small>六才</small>	治	重 <small>五才</small>	吉	小	秋 <small>五才</small>	兼	小
------------------------	--------------------	------------------------	------------------------	--------------------	--------------------------	---	---------------------------	---	-----------------------	---	---	-----------------------	---	---	------------------------	---	---------------------	---	---	---------------------	---	---	---------------------	---	---------------------	---	---	---------------------	---	---

正 <small>三分十三才</small>	次	仙 <small>二分十二才</small>	之	助	角 <small>一分十二才</small>	松	小	彦右衛門 <small>一分十二才</small>	小	一 <small>一分二才</small>	艘	二	ワ <small>一分二才</small>	ッ	チ	国 <small>九才</small>	藏	小	梅 <small>八才</small>	吉	小	茂助 <small>七才</small>	龜	小	庄太郎 <small>六才</small>	小	久五郎 <small>五才</small>	小	彦 <small>四才</small>	松	小
------------------------	---	------------------------	---	---	------------------------	---	---	---------------------------	---	-----------------------	---	---	-----------------------	---	---	---------------------	---	---	---------------------	---	---	----------------------	---	---	-----------------------	---	-----------------------	---	---------------------	---	---

<sup>四才</sup>久作小  
<sup>四才</sup>竹二郎小  
<sup>三才</sup>七郎常小  
<sup>二才</sup>安太郎小  
<sup>一才</sup>彦辰小  
<sup>一才</sup>友金小  
<sup>一才</sup>秋辰小  
<sup>女</sup>乙吉小  
<sup>女</sup>才吉小  
 〆百九十七人九分

<sup>四才</sup>彦吉小  
<sup>四才</sup>小作小  
<sup>三才</sup>彦松小  
<sup>二才</sup>久五郎小  
<sup>一才</sup>茂助辰小  
<sup>一才</sup>長吉小  
<sup>女</sup>与作小  
<sup>女</sup>半一小

<sup>四才</sup>房吉小  
<sup>四才</sup>長吉小  
<sup>三才</sup>重吉小  
<sup>一才</sup>伊左衛門小  
<sup>一才</sup>吉太郎小  
<sup>一才</sup>銀作小  
<sup>女</sup>虎次小  
<sup>女</sup>床国小

漁船が大型化したことや、一つの船中が複数の漁船を出資所有するようになって、乗組定員が増加し船中外からの雇漁夫がみられるようになった。人名の頭につけられた地名はその場合の出身地を示す。すなわち房州は千葉県安房郡白浜村や布良村、川尻と住吉は静岡県榛原郡川尻村と住吉町、仙台は宮城県からのそれぞれ臨時乗組員である。船代も大型化と第一富久丸・第三富久丸の二隻を所有したことで増加し、役代もともに代って船頭船長・機械士・ワッチ（見張り）が新設された。人名の末尾に小と書いてあるのは年少者である。

年少者の配当は、左のとおりとなった。

一歳より十歳まで

全体に対して一人四分

十一歳

一人代の一分

十二歳

一人代の二分

十三歳

一人代の三分

以後十四歳より沖乗りをするもの

十四歳

一人代の四分

十五歳

一人代の五分

十六歳

一人代の七分

十七歳

一人代の八分

十五歳より沖乗りするもの

十五歳

一人代の四分

十六歳

一人代の六分

十七歳

一人代の八分

十六歳より沖乗りするもの

十六歳

一人代の五分

十七歳

一人代の七分

年少者の場合、小学校高等科や水産学校等への進学等によって乗船年齢もまちまちになってくるので、基準も複雑になっていった。また人名の末尾に女と書いてあるのは、男子の後継者のない漁家に対して長女にのみ男子と同じ配当を行ったもので、これはのちに婿養子をもつかえて、漁家が継承されることを考えての措置である。第一表にみるとおり、乗組員中に養子のケースが多い地域である。



第二表 富久丸船中夏海配当表(単位 人代)

一 三 歳	一 四 歳	一 五 歳	一 六 歳	一 七 歳	兵 役	岡 役	雇 漁 夫	沖 乗	年 度
	1	0.6	1.6		0.8	1.2		32	明治21
0.4		0.6	1.6			1.2		33	22
0.4	0.5		1.6	0.8		0.6		34	23
	0.5	0.6	0.8					37	24
		0.6	0.8	0.8	0.3			32	25
1.2			0.8		0.3	0.8		37	26
0.8	1	1.2			0.6	1.6		34	27
0.8	1	1.2	1.6		0.6	0.4		35	28
0.8	1	1.8	1.6	1.6	0.3	0.4	2	32	29
0.4								32	30
1.6	0.5	1.2	1.6			0.8	1	35	31
2	1.5	0.6	1.6	0.8				37	32
0.8	2	1.8	0.8	0.8		0.4		37	33
	1	2.4	2.4	0.8				33	34
1.6		1.2	3.2	1.6				33	35
0.4	2		1.6	2.4				37	36
0.4	0.5	2.4		1.6		0.7		43	37
0.4	0.5	0.6	2.4		0.2	1.5	2	40	38
2		0.6	0.8	2.4	0.7	1.6		42	39
	2	0.6	0.8	0.8	0.7	1.6		46	40
2.8		2.4			1.2	0.8		50	41
1.2	3.7		4		0.6	0.8		50	42
	1.8	3.6		2.4	0.4		7	47	43
		1.9	4.9				9	48	44
1.5			2.8	4			9	51	45
0.6	2.8				0.4	0.8		57	大正 2
0.6	0.8	3.3						59	3
0.9	0.8	1.5	3.5		0.4			55	4
0.9	1.2	1	1.4	1.6	0.4			56	5
0.6	0.8	1.4	2.	2.3	0.4			58	6
0.9	0.8	0.9	2.7	2.4	0.8			61	7
0.9	1.2	1	2.8	7	0.4		27	62	8
0.6	1.2	1.9	1.4	4.8	0.4		28	62	9
0.9	0.8	2	2.8	1.6	0.4	0.8	35	68	10
2.1	1.2	1	2.8	3.2	0.8		39	66	11
0.9	3.2	1.3	2.6	4	1.2	1.4	35	62	12
1.2	1.2	3	3.4	8		0.7	31	71	13
0.3	1.6	1.5	2.8	4.8	1.2	2	46	75	14
0.6		1.5	1.4	3.2			38	57	15
0.3	2	0.5	2.1	1.6	0.9		36	53	昭和 2
0.15	0.3	0.6	1.2	2.4	1.6		32	55	3
0.15	0.15	0.3	4.8	1.6	0.6		35	61	4
0.3	0.3	0.15	2.1	5.6	0.8		32	44	5

注 合計欄の数値が各欄の総和と一致しないが本表では資料の数値のまま記した。  
「久次郎船人名簿控」(近藤久一郎氏蔵)より作成。

合計 代人	船 代	役 代	合六 歳以 計下	七 歳	八 歳	九 歳	一 〇 歳	一 一 歳	一 二 歳
43.65	3.5	2.1	0.6	0.3	0.1		0.4	0.25	0.3
45.25	3.5	2.1	0.7	0.1	0.15	0.2		0.25	0.3
46.2	3.5	2.1	0.7	0.2	0.1	0.45	0.4		0.6
50	3.5	2.1	0.6		0.4	0.3	0.2	0.75	0.9
43.5	3.5	2.1	0.35	0.3	0.4	0.15	0.4	0.25	0.9
49.95	4.5	2.1	0.25	0.2	0.3	0.6	0.2	0.5	0.6
45.15	4.5	2.1	0.3	0.2	0.2	0.6	0.8	0.25	0.6
48.3	4.5	2.1	0.4	0.2	0.1	0.3	0.8	1	0.3
53.5	4.5	2.1	0.5	0.1	0.2	1.5	0.4	1	1.2
53.6	4.5	3.3	0.6	0.2	0.1	0.3	0.2	0.5	1.2
54.3	4.5	3.3	0.8		0.2	0.15	0.4	0.25	0.6
54.9	4.5	3.3	0.8	0.5		0.45		0.75	
51.9	4.5	3.2	0.8	0.1	0.5		0.6		0.9
51	4.5	3.2	0.5	0.4	0.1	0.75		0.25	0.3
53.95	4.5	3.2	0.4	0.3	0.5	0.15	1.2		0.3
59.5	4.5	3.2	0.5		0.3	0.75	0.2	1.25	0.3
60.2	4.5	3.2	0.5			0.45	1	0.25	1.2
62.65	5.3	3.2	0.5	0.5			0.6	1.75	
64.8	5.3	3.2			0.5			0.75	2.1
64.4	8.5	4.7	0.6		0.4	0.6			1.2
75.7	8.5	4.2	0.5	0.3	0.2	0.6	0.8		0.9
79.3	8.6	4.2	0.65	0.2	0.3	0.6	0.6	1	
81	8	5.4			1.4			0.4	1
88.5	9	5.4			1.3			0.2	0.8
79.9	12	4.2			1.3			0.3	0.4
83	10	4.6			1.3			0.3	0.6
80.7	12	4.6			1.3			0.1	0.6
81.5	12	4.6			1.4			0.3	0.6
86	14.5	5.1			1.2			0.3	0.6
88.9	12	5.1			1.3			0.1	0.6
152.2	36.5	6.9			1.3			0.4	0.6
150	36.5	9.2			1.3			0.4	0.4
162	36.2	8.7			1.4			0.4	1
168.6	36.2	8.7			1.4			0.2	0.6
161.2	36.2	7			1.5				0.8
197.9	66.2	8.7			1.5			0.8	0.2
205.9	66.2	9			1.5			0.2	1.6
177.55	62.2	11.2			1.2				0.2
177.15	62.3	9.4			1.2				0.1
165.85	62.3	9.4			1.2				0.2
191.4	75.8	8.6			1.2				0.2
190.8	75.8	10.6			1.5				0.4

この基準は大正十五年にさらに一部変更になり、役代に通信士二分、機械(関)士二人八分、電気(係)一人、餌投げ二分が増加した。

年少者の配当も次のように変更になった。

一歳から十一歳まで

十二歳

十三歳

十四歳から沖乗りするもの

十四歳

十五歳

十六歳

十七歳

十五歳から沖乗りするもの

十五歳

十六歳

十七歳

十六歳から沖乗りするもの

十六歳

十七歳

以上を一覧表にしたものが第二表である。

注

(一)「人名簿控」久次郎船「近藤久一郎氏蔵。

全体で一人二分

一人代の一分

一人代の一分五厘

一人代の一分五厘

一人代の五分

一人代の七分

一人代の八分

一人代の一分五厘

一人代の七分

一人代の八分

一人代の一分五厘

一人代の七分

## (1) 前掲書(1)。

## 五 法人と船中による漁船共有制の経営的意味

漁業において血縁親族経営がとられる背景については、生産手段の共同体的所有や技術の伝承および洋上での協働組織の存在等が考えられるが、この他に経営上の意味について考えよう。一般に漁業は豊漁と不漁の振幅が大きい。第三表は、出資法人東海遠洋漁業株式会社と近藤久蔵を船元とする久次郎船船中とで共有され、同船中が経営する富久丸の大漁(五月五日から九月一五日までの約百三十日間の鯉漁で、夏海ともいわれる)の船中内配当計算の基礎となった一人分所得(一人代)の推移である。統計期間が四十年以上にわたると貨幣価値の変動もあって単純には比較できぬが、不漁の大正五年と三年後の豊漁の大正八年との間には七・三倍の差がある。その際、経営上船価償却費や餌料費・燃料費等は支出金額がある程度固定した項目であるので、豊凶漁の影響は人件費の弾力性によって緩衝せざ

第三表 富久丸夏漁一人当たり配当金

金 額			年 度
円	銭		
7	98	3	明治21
6	74	4	22
			23
			24
11	42	4	25
			26
15	73	9	27
38	99	1	28
14	91	4	29
36	51	4	30
16	99	8	31
			32
18	96	9	33
20	60	0	34
42	04	6	35
19	83	7	36
66	24	2	37
			38
54	76	4	39
36	49	1	40
58	18	2	41
59	00	9	42
57	32	2	43
			44
89	25	0	45
63	60	2	大正2
91	37	1	3
57	23	7	4
77	14	0	5
			6
70	47	9	7
58	97	0	8
62	71	6	9
41	38	0	...
			2
268	82	0	3
232	18	0	4
303	48	0	5
251	28	0	...
			2
127	90	0	3
187	48	0	4
213	00	0	5
64	90	0	

明治二十一年より大正六年までは各年度「夏海当り帳」(近藤久一郎氏蔵)  
大正七年より昭和五年までは「人名簿控」(近藤久一郎氏蔵)より作成。

るを得ないところで、人件費は歩合制がとられる。法人と船中による漁船共有制は、実質的には労働者である船中船方も経営上共同責任体制に組みこむことになり、経費先取りの歩合制賃金制を合理化する論拠となっていた。

## 六 結 語

最後に船中なる血縁共同体の経済史上における意味について若干のまとめをしておく。当時の当地における鰹漁業の労働市場は、この血縁共同体による規制下におかれ、これはまた漁船への出資制度と老幼者等非労働年齢層にもおよぶ利益配当慣行によって守られていた。また経費先取り慣行と配当の歩合制からすれば、直接労働者に対する賃金範疇はまだ成立していなかったことを示す。このことは船元を除けば実質的には直接労働者にすぎない船中船方をして、漁船への共同出資によって経営上の共同責任体制下におくことで合理化されている。一方共同出資者の相方である東海遠洋漁業株式会社や焼津町生産組合等の出資法人にしても、労働過程は船中に委ねられているのでこれを直接包摂しておらず、高利貸資本の域に止まっていた。<sup>(一)</sup>しかし他人資本になかば依拠した船中、すなわち新旧ウクライドの連接体の内部における階層分化から、やがて新しい産業資本が発生してくるのであった。

## 注

- (一) 拙稿「静岡県焼津における鰹漁業の発達と東海遠洋漁業株式会社」法政大学教養部紀要 第五五号 社会科学編 昭和六〇年 二九一五七頁。